

って直線的に通路が伸びており、その両側に通路に直交する方向に長軸を有する平場が階段状に展開する。その最奥は観音堂跡という伝承が残る広い平場であり、この付近に主要堂宇があったと推定する。また、その背面の斜面には石塔部材を含む集石遺構が確認できることから、墓域を形成していたと考えられる。なお、2時期目は直線通路や小型石塔の存在などから15・16世紀には機能していたと考えられ、この寺院地には金鑄場があったとされている。

3時期目の寺院地は現弓削寺境内である。慶長7（1602）年にこの地に移転しており、本堂の前面には直線通路が伸び、その両側には細長い平場が残っている。なお、2時期目と3時期目の直線通路の軸線はややずれているが、2時期目の寺院地が現本堂の東側まで展開していた可能性もある。

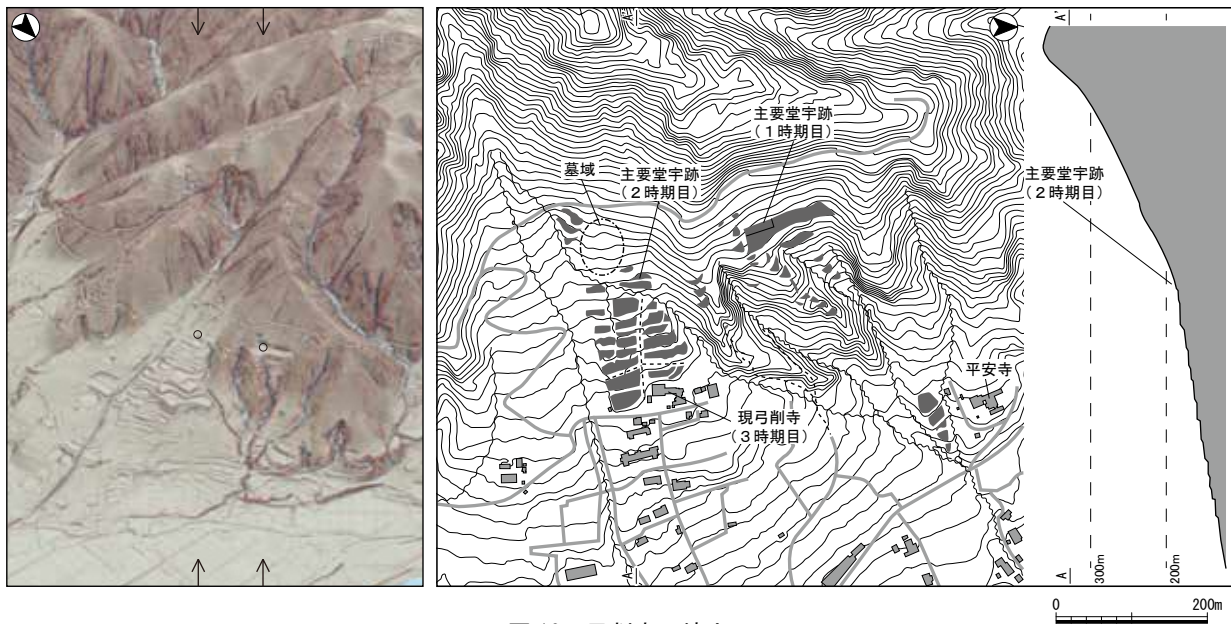


図10 弓削寺旧境内

(3) 山麓から山腹等に立地する寺院

①栗原九十九坊跡（不破郡垂井町、養老郡養老町、大垣市）（図11）

象鼻山から南宮山に延びる山地の、東山麓から尾根にかけて平場が広域に展開する天台宗の寺院であり、山麓の集落域と主要堂宇跡との比高差は約145m、斜距離は約550mを測る。本寺院は旧不破郡、養老郡、石津郡の郡境に位置する。天文14（1545）年に書き留められた文書の写しによると、鎌倉時代初期には久保双寺と呼ばれ、100以上の僧坊があり、建武2（1335）年の足利・新田の戦いにて焼失、あるいは織田信長の兵火により焼失したとされている。

山麓には水路を挟んで併行する2条の直線通路（通路1・2）があり、いずれも通路に直交する方向に長軸をもつ細長い平場が階段状に認められる。このうち、通路1に接する清水寺跡の平場が最も広く、ここには「美州不破郡栗原村清水寺奉鑄治鐘 宝治元年未丁九月廿日東大寺大工散位山河清衆徒」の銘が残る梵鐘があったとされるように、宝治元（1247）年以前には寺院が成立していたと考えられる。また、尾根筋には通路3があり、通路に沿って台形から三角形の平面形を呈する平場が展開し、山頂付近まで伸びている。山頂付近には谷奥に広い平場Aがあり、そこには後世に集められた多数の石塔が積み上げられている。また、その北側の通路を進むと幅約75mの最も広い平場にたどり着き、ここには東西約14m、南北約16mの方形基壇があることから、主要堂宇があったと推定される。そ

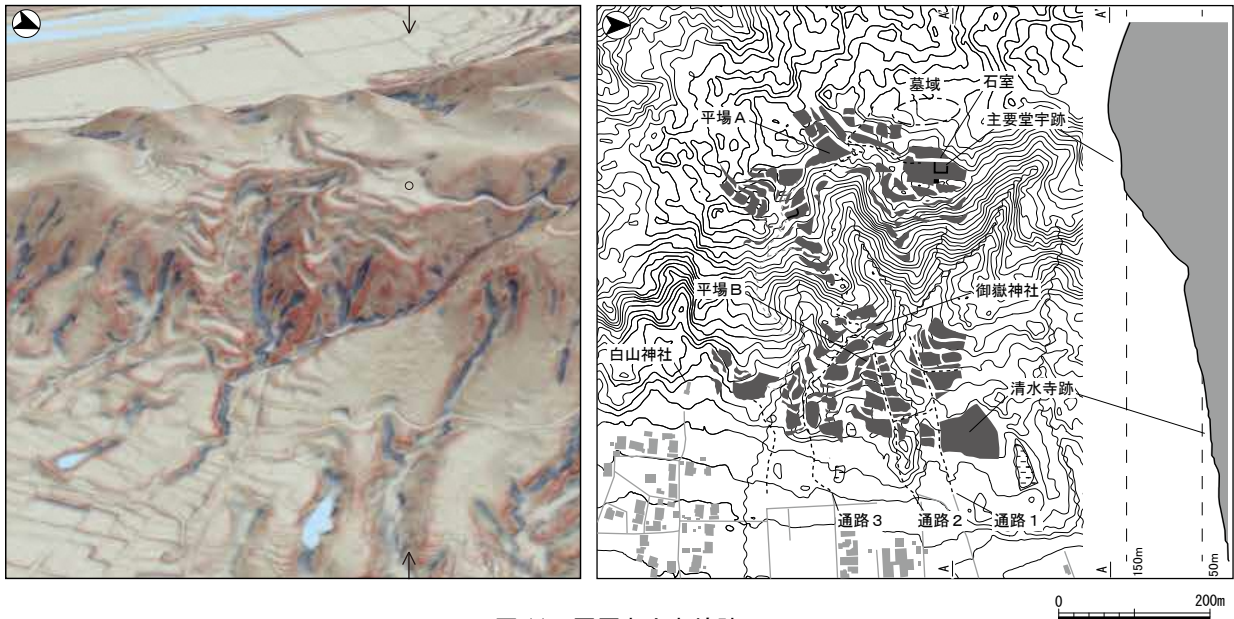


図 11 栗原九十九坊跡

の背面の斜面には角礫積みの石室（窟）が残り、さらに、その上部の尾根には墓域が展開し、石塔の部材が散在する集石遺構が広がる。

本寺院が位置する垂井町では平成 24～28 年度に遺跡詳細分布調査がなされ、本寺院からは須恵器や灰釉陶器、中世陶磁器などが採集された（垂井町教委 2017）。その成果は総合調査報告書（県文セ 2023）でも報告され、山上の平場 A と山麓の平場 B で 8 世紀の須恵器が分布していることが明らかにされている。また、山麓部では部分的に発掘調査が実施されている（県文財セ 2020）。これらの調査成果から、本寺院は 8 世紀頃には山麓と山頂において何等かの宗教施設があり、12～13 世紀頃には坊院坊舎が山全体に広がり、須恵器の分布域とは位置を変えて、引き続き中世段階も山上と山麓に主要堂宇が営まれていたと考えられる。

②桜堂遺跡・笹山遺跡（瑞浪市）（図 12）

桜堂遺跡は丘陵の南西斜面に位置する天台宗の寺院跡であり、山麓の集落域と本堂跡との比高差は約 50 m、斜距離は約 300 m を測る。桜堂遺跡は平成 23・25～27 年度に、笹山遺跡は平成 22 年度に発掘調査が実施され、桜堂遺跡からは寺院跡と中世墓、笹山遺跡からは経塚と中世墓が検出されている（瑞浪市教委 2014・2017）。

桜堂薬師は、寺伝によれば弘仁 3（812）年に瑞櫻山法明寺として創建され、元亀 2（1571）年に兵火によって焼失したとされる。しかし、それらを裏付ける資料が現在まで知られておらず、発掘調査の結果、10 世紀中頃に小規模な堂宇が創建され、12 世紀後半から 13 世紀にかけて大きく発展し、15 世紀後半に堂宇が移動（下山）したと考えられている。本堂跡は山腹の平場の最高所に位置し、掘立柱建物跡が検出されている。また、本堂跡の北側には複数の細長い平場が連続し、集石を伴う墓域を形成している。一方、笹山遺跡は桜堂遺跡のある谷の入り口付近の丘陵上に位置する経塚・中世墓群である。12 世紀後葉から 13 世紀前葉にかけて山頂部に経塚が営まれ、12 世紀末から 15 世紀後葉まで山腹に集石墓群が継続して造営されている。

なお、桜堂遺跡の北から南西にかけての河岸段丘上には「多聞坊」や「西之坊」などの複数の口伝

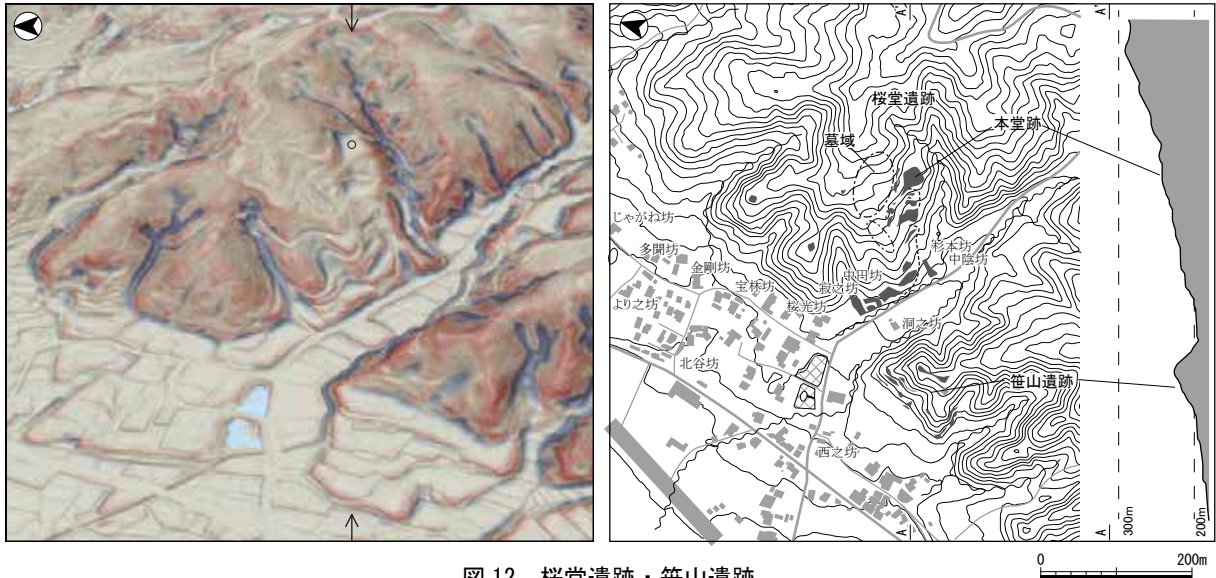


図 12 桜堂遺跡・笹山遺跡

等による私称地名がある。これらの場所では中世の遺物が採集でき、寛文5（1665）年の寺領寄進絵図にも幾つかの坊名が記載されていることから、桜堂遺跡が位置する谷・丘陵を核として、その前面の河岸段丘の参道に沿って坊院坊舎が連なっていた可能性が指摘されている。このように、桜堂遺跡における中世の宗教活動の場は、谷から山麓一帯が中心となっていた可能性がある。

(4) 山麓・山腹に立地する寺院の構造

山麓の緩斜面や山腹の斜面に位置する多くの寺院は、斜面を段切り造成して平場を形成し、堂舎等の施設を設置している。そして、斜面の傾斜が強いほど平場間の段差が大きく、平場の前後が急勾配となる（横蔵寺旧境内、円興寺旧境内、弓削寺旧境内（1時期目）、栗原九十九坊跡の山間部など）。一方、緩斜面での造成では平場間の段差が小さく、平場間の往来が比較的容易で、広い平場を確保できる傾向にある（柏尾廃寺、大威徳寺、栗原九十九坊跡の山麓部など）。平場の斜面には土留めのための石積み認められ、特に主要堂宇や参道に沿った人の目に着きやすい場所には大きめの石材が用いられている（横蔵寺旧境内、威徳寺旧境内（垂井町：県文財セ2023）、愚溪寺旧境内（御嵩町：県文財セ2023）など）。

平場の平面形は、急傾斜地や谷筋では等高線に沿った細長い形状のものが目立ち、尾根上では地形に沿った三角形状や台形状のものが目立つ。また、谷筋では山門から主要堂宇に至る通路が等高線に沿って延びていることが多く、通路を歩くと通路に沿うような細長い平場を視認できる（横蔵寺旧境内、円興寺旧境内、栗原九十九坊跡など）。一方、主要堂宇に向かって直線的に延びる通路も散見でき、通路に対して直交する方向に細長い平場が通路の両側に配置される事例（柏尾廃寺、竜泉寺廃寺、弓削寺旧境内、栗原九十九坊跡など）もある。これらは、通路間や平場の両端間の距離がおよそ100m強であり、一町を基本とする単位で土地が区画された可能性がある。なお、このような地割は藤岡氏の平坦面分類のC1類に分類され、畿外での普及は15世紀以降まで降るとされている（藤岡2012）が、竜泉寺廃寺の直線通路（通路1）は、13世紀末から14世紀前半頃に整備された可能性が高いとされており、今後の調査成果が期待される。

さて、主要堂宇のある平場は谷部の最奥や平場群の最高所に位置し、その面積も広く、基壇状の高

まりや礎石が認められることが多い。主要堂宇の建物や基壇の向きは、真南を向くもの（日焼遺跡、円興寺旧境内）と地形の傾斜に準じているもの（寺屋敷遺跡、柏尾廃寺跡、竜泉寺廃寺跡、白雲山観音堂、弓削寺旧境内、栗原九十九坊跡、桜堂遺跡）、谷の開口部を向いているもの（光寿庵跡、横蔵寺旧境内、愚溪寺旧境内）などがある。しかし、大威徳寺跡のように地形の傾斜に沿わずに山門から本堂までが真北を意識した構造の寺院もある。また、主要堂宇の前面には平場群が展開する事例が多く、これは他県の山寺の様相（久保 2001）とほぼ同じ状況であるといえる。さらに、西濃圏域の寺院では成立期に近い時期の遺物が平場群の最奥付近を中心に採集されており（柏尾廃寺、竜泉寺廃寺、横蔵寺旧境内、栗原九十九坊跡）、まずは緩斜面の高所や谷の最深部などの広い場所に小規模な施設等が造営され、その後、主要堂宇として機能するとともに、その前面に複数の平場が展開していくという土地利用の推移も想定できる。

なお、主要堂宇のある平場は山頂や尾根上にあることが稀で、多くは山頂付近の鞍部や尾根付近の鞍部に認められる。これは、寺院で活動する僧尼が居住や修学を行うための水の確保や、山頂に吹く強い風に対する防風などの目的があったと考えられる。特に水の確保は寺院経営にとって重要な要素であり、山水は仏にささげる聖水（閼伽水）にもなり（上原・梶川 2007）、光寿庵跡や横蔵寺旧境内、大威徳寺跡などのように湧水点から本堂脇の池へと導水している事例もある。また、湧水点から流れ出る水を含め、山水は谷川を介して山麓まで流れ、集落へと水を供給しており、山水の源にある寺院は聖なる場所として信仰の対象となる。さらに、谷川が山麓において1箇所合流する付近にも寺院が造営されており（柏尾廃寺跡、光堂寺廃寺跡、平安寺）、寺院が水利に関わっていた可能性も考えられる。

一方、主要堂宇の周辺には経塚や墓域が確認できる。寺院と経塚の位置関係が把握できる事例としては、寺域に至る入り口付近の高台に経塚が造成されるもの（桜堂遺跡と笹山遺跡（図 12）、増福寺と酒波神社経塚（瑞浪市：県文財セ 2023）、萬勝寺伝北ノ本坊跡と飯高経塚（恵那市：県文財セ 2023））と、主要堂宇の背面の山頂・山稜に造営されるもの（神光寺と洞雲戸遺跡（関市：県文財セ 2005））がある。また、柏尾廃寺跡や円興寺旧境内では墓域で経筒片が採集されており、主要堂宇の背面の斜面の高所に経塚が造営され、その周辺が後世になって中世墓群として利用されたと推測できる事例もある。その典型例としては笹山遺跡を挙げることができる。

集石と石塔が伴う墓域は、①主要堂宇の背面付近の斜面や尾根上にある場合（柏尾廃寺跡、円興寺旧境内、弓削寺旧境内、栗原九十九坊跡、桜堂遺跡）、②主要堂宇から谷や山を挟んだ離れた場所にある場合（光堂寺廃寺跡、横蔵寺旧境内、大威徳寺跡、笹山遺跡）、③主要堂宇と連続する平場の一面にある場合（白雲山観音堂）、④主要堂宇に至る途中の平場にある場合（美濃市西観音寺遺跡（美濃市教委 2012））などがある。発掘調査等は実施されていないが、筆者が現地を確認した③と同様な事例は清峰寺跡（高山市）、④と同様の事例は野上廃寺（垂井町）、円興寺旧境内（大垣市：源朝長墓・大炊家墓）、洞山寺跡（高山市）などがある。




2 寺院の存続期間と立地の変化

次に、発掘調査や詳細分布調査が実施された寺院における、遺構や遺物から推定できる存続期間と立地について検討したい。表 1 は、それらの調査成果が掲載された報告書をもとに、寺院の存続時

表1 寺院の消長表

No.	圏域	市町村名	寺院名	立地	遺物の時期	7C	8C	9C	10C	11C	12C	13C	14C	15C	16C
1	西濃	垂井町	宮代廃寺跡	平地	7c中～9c?										
2	中濃	御嵩町	願興寺跡	平地	7c中～現代										
3	岐阜	岐阜市	長良廃寺	平地	7c後～		?								
4	岐阜	各務原市	野口廃寺	平地	7c後～8c										
5	飛騨	高山市	光寿庵跡	山腹	7c後～			?							
6	岐阜	各務原市	山田寺跡	平地	7c後～9c後										
7	飛騨	飛騨市	寿楽寺廃寺跡	平地	7c後～9c後										
8	飛騨	高山市	石橋廃寺	平地	7c後～10c										
9	西濃	池田町	高畑遺跡	平地	7c末～12c										
10	飛騨	高山市	三仏寺廃寺	平地	7c後～12c										
11	中濃	関市	弥勒寺跡	平地	7c後～15c										
12	東濃	恵那市	手向廃寺	山麓	8c										
13	飛騨	飛騨市	杉崎廃寺跡	平地	7c末・8c初～8c末・9c初										
14	飛騨	飛騨市	古町廃寺跡	平地	7c末・8c初～8c後										
15	西濃	垂井町	美濃国分尼寺	平地	8c中～9c末										
16	飛騨	飛騨市	上町廃寺跡	平地	7c末・8c初～9c後										
17	東濃	恵那市	正家廃寺跡	山麓	8c中～10c後										
18	飛騨	高山市	日焼遺跡	山腹	8c後～10c										
19	飛騨	高山市	三枝城跡	山腹	8c後～10c後										
20	西濃	大垣市	美濃国分寺跡	平地	8c中～12c末										
21	飛騨	高山市	飛騨国分尼寺跡	平地	8c～12c										
22	西濃	養老町	柏尾廃寺跡	山麓	8c～16c前										
23	西濃	垂井町	栗原九十九坊跡	山麓～山麓	8c～現代										
24	飛騨	飛騨市	西ヶ洞廃寺跡	山麓	9c後～10c										
25	西濃	揖斐川町	横蔵寺旧境内	山腹	9c後～14c前										
26	西濃	揖斐川町	寺平遺跡	山腹	9c後～10c										
27	西濃	揖斐川町	寺屋敷遺跡	山腹	10c～11c前										
28	東濃	恵那市	大船寺跡	山腹	10c～									?	
29	中濃	郡上市	白雲山観音堂	山腹	10c～15c										
30	東濃	瑞浪市	桜堂遺跡	山麓～山麓	10c中～15c後										
31	飛騨	下呂市	大威徳寺跡	山腹	10c～17c										
32	西濃	池田町	弓削寺旧境内	山腹	12c～									?	
33	西濃	大垣市	円興寺旧境内	山腹	12c後～15c?										?
34	西濃	養老町	竜泉寺廃寺跡	山麓	12c初～15c										
35	西濃	養老町	光堂寺廃寺跡	山麓	12c～16c										
36	岐阜	岐阜市	千畳敷遺跡	山麓	13c～15c										
37	東濃	恵那市	観定寺遺跡	山麓	13c中～16c前										
38	東濃	恵那市	大円寺跡	平地	14c前～16c後										
39	東濃	多治見市	永保寺寺院跡	平地	14c～現代										
40	岐阜	各務原市	承国寺遺跡	平地	15c中～16c前										

※参考文献は文書末に記載した。

凡例  遺構が存続した時期
 遺物が確認された時期
 寺院の終焉時期が不明

期や遺物の時期を一覧表にしたものである¹²⁾。表1をみると、寺院及びその関連遺跡における遺構・遺物の始まりは、7世紀代、8世紀代、9世紀後半～10世紀代、12～13世紀代が目立ち、その終わりは8世紀代、9世紀後半～10世紀代、12世紀代、15～16世紀代が多いようである。そのため、寺院及びその関連遺跡の存続期間の画期として、7世紀代、8世紀代、9世紀後半～10世紀代、12～13世紀代、15～16世紀代の5時期を設定し、以下に各時期を概観したい。

なお、寺院は「地域社会の影響を受けて展開」(藤岡2012)しており、「里山、村里、水陸交通といった場での、社会生活に不可分な役割を果たしていた」(上川2014)とあるように、その存続期間を検討する上では地域社会の動向との比較が重要となるため、ここでは既存の集落遺跡の研究も加味して検討する。

(1) 7世紀代

美濃・飛騨において、寺院が創建される時期である。7世紀中頃から後半には、いわゆる川原寺式の瓦が入る前段階の瓦が確認された寺院として宮処寺跡、宮代廃寺、厚見廃寺、願興寺廃寺などがあり（井川 1994）、これらの寺院はいずれも平地に位置し、宮処寺跡と宮代廃寺、願興寺廃寺などはそれぞれ濃尾平野を西端と東端に位置する寺院といえる。また、7世紀後半には美濃・飛騨で寺院の創建数が増加し、その多くは平地に造営されている。特に厚見郡や各務郡では一郡内でも複数の寺院が造立され、各務郡の寺院は互いに同范関係も確認されていることから、建立に際しても密接な関係を有していたとされる（林 2021）。そのような中で光寿庵跡のみが山腹に位置していることは重要であり、すでに菱田氏が指摘しているように（菱田 2023）、光寿庵跡と石橋廃寺は山寺と平地寺院が一对となる存在形態の典型例として評価でき、畿内で形成された寺院間のネットワークの伝播（上原 2002）が確認できる一事例といえよう。

また、各務郡を中心とした美濃の集落遺跡の消長を分析した渡辺氏は、7世紀後葉が美濃における大きな社会変化の時期であったとし、須恵器生産の美濃須衛窯への一元化や古代寺院の造営などが同時期の集落の動向にも反映しているとした（渡辺 2003）。

(2) 8世紀代

国分寺・国分尼寺が創建される時期であり、7世紀代の寺院が確認されていない東濃圏域でも、この時期になって正家廃寺や手向廃寺などの寺院が創建される。8世紀代の寺院も平地に造営されることが多いものの、正家廃寺や手向廃寺などは現集落から数10 m程高い丘陵上に造営されている。

国分寺・国分尼寺周辺においては、美濃では栗原九十九坊跡や柏尾廃寺跡などで8世紀代の遺物が採集され、飛騨では日焼遺跡や三枝城跡などで鉄鉢や多口瓶など仏教的要素の強い遺物が出土している。これらの遺跡の特徴として、採集・出土した8世紀代の遺物がそれほど多くなく、遺構も判然としないことが挙げられ、山中には建物等がなかったか、存在したとしても草庵程度の小規模な建物であったと考えられる。菱田氏が「これらの諸寺に国分寺僧の活動を重ねることは妥当」（菱田 2023）としたように、これらの遺跡は国分寺から約10 kmの範囲内に所在し、僧尼の山林修行の場などとして機能した可能性がある。一方で、これらの遺跡の山麓付近の平地には、須恵器等の遺物が集中して分布する遺跡が近接している。具体的には栗原九十九坊跡の東側の栗原山麓遺跡（垂井町 2017）、柏尾廃寺の東側の戸関遺跡（養老町 2007）、日焼遺跡や三枝城跡の南側の野内遺跡（県文財セ 2009・2012）であり、このうち戸関遺跡の性格は郡衙もしくは寺院が想定され、野内遺跡の村落の形成には官衙（公的施設）などの関与が想定されている。このように、国分寺僧の活動が想定できる遺跡の近辺には一般的な集落遺跡とは異なる性格をもつ遺跡が展開しており、その居住者は国分寺を維持管理するための経済的な援助や僧尼の活動を支援するなど、国分寺僧と何等かの関連性があったと考えられる。

(3) 9世紀後半～10世紀代

山麓や山腹に多くの寺院（もしくは宗教施設）が造営される時期である。寺院の立地は多様であり、西ヶ洞廃寺のように山麓にある寺院や、寺平遺跡・寺屋敷遺跡・日焼遺跡のように8世紀代と同様な平地から数10 m高い位置にある寺院、横蔵寺旧境内・白雲山観音堂・大威徳寺跡・大船寺跡（恵那市）などのように、平地との比高差が100 m以上ある寺院などがあり、特に横蔵寺旧境内や大船寺跡など

は現集落域から 200 m 以上離れた山中に造営され、8 世紀代と比較するとかなり人里から遠い場所での寺院の造営が認められる。

しかし、寺院といっても桜堂遺跡では小規模な山寺が想定され（瑞浪市 2017）、大威徳寺跡や横蔵寺旧境内でも出土遺物の少なさから小規模な施設の存在が想定できる。また、白雲山観音堂や大船寺跡、三枝城跡も山頂付近の寺院（もしくは宗教施設）であるものの、数段の平場が確認できる程度の広さであり、この様相は平地から数 10 m の位置にある寺平遺跡、寺屋敷遺跡などでも同じである。つまり、この時期は斜面を切り盛りによって段造成し平場を形成しているものの、数段程度の小規模な造成に留まることから、現時点では山中にて平場が広域に展開するのは中世以降と考えておきたい。

なお、この時期には 7・8 世紀に創建された幾つかの寺院が廃絶している。特に飛騨圏域においては、発掘調査が実施された古代寺院のうち寺院に伴う遺構が中世まで継続する事例は確認されておらず、いずれもこの時期までに廃絶しているという特徴がある。飛騨圏域においては、先述した野内遺跡の遺構が 10 世紀後半頃に激減しており、郡衙に関わる中枢施設であった可能性が指摘されている上町遺跡も 10 世紀後半に集落が途絶するとされている（飛騨市教委 2023）ように、寺院と集落の盛衰が連動している状況が看守できる。

(4) 12 世紀～13 世紀代

山麓・山腹において、11 世紀以前から存続している寺院の寺域が拡大し、かつ複数の平場を有する寺院が造営され始める時期である。発掘調査や分布調査の結果、前段階以前に成立した桜堂遺跡や大威徳寺跡ではこの頃の遺構が広域に確認され、柏尾廃寺跡では遺物の採集場所が広がり、採集された遺物量も増えている。また、西濃圏域では弓削寺旧境内や円興寺旧境内、竜泉寺廃寺や光堂寺廃寺などの大規模な寺院の造営がこの時期から始まるようであり、同圏域にある 8 世紀から存続していた美濃国分寺や高畑遺跡などの伽藍を有する寺院の機能が認められなくなる時期に、その周辺の山麓・山腹に新たに寺院が成立・拡大する状況が看取できる。また、この時期は美濃における中世集落の開始期であり（内堀ほか 2002）、美濃における中世寺院の成立と寺域の拡大は、集落の成立と軌を一にしている。

さらに、この時期は、養老町域の寺院（柏尾廃寺、光堂寺廃寺、竜泉寺廃寺）が近接する谷ごとに大規模な寺域を形成し、寺院群として機能した時期でもある。このような谷ごとに寺域を形成する事例として、鎌倉時代の最盛期には「六谷六院、神社仏閣三十字、衆徒三百六十坊」があったとされる白山信仰の拠点である長瀧寺（郡上市）周辺も同じ状況であったと考えられる。

(5) 15 世紀～16 世紀代

古代や中世前期から存続していた山麓や山腹に位置する寺院の多くが衰退し、代わりに平地を中心に寺院数が急増する時期である。発掘調査や詳細分布調査の結果では、15～16 世紀代に山麓や山腹の寺院が衰退する事例が多く、同時期に新たに出現する寺院の調査例は少ない。一方で、総合調査の結果では 15 世紀後半における寺院の成立数が顕著で、その多くが平野や山麓に造営されている（表 2・3）。また、美濃における中世集落の多くは山茶碗第 11 型式（15 世紀中葉前後）までで廃絶し、それ以降は位置を変えて存続する可能性が高いと指摘されている（内堀ほか 2002）。15 世紀後半に新たに創建された中世寺院は現在の集落とほぼ重なる位置に多く認められることから、集落の集村化に

表2 時期別・圏域別の成立数（総合調査報告書（県文財セ2023）の数値から作成）

	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	合計											
西濃	3	18	11	35	4	7	10	2	3	2	16	13	9	15	18	10	78	65	55	67	60	26	527
岐阜	20	25	8	18	4	3	4	2	0	3	20	26	12	13	23	13	71	60	78	63	43	25	534
中濃	6	27	3	7	1	5	8	1	2	2	8	7	15	12	21	13	46	40	75	54	46	22	421
東濃	1	3	2	2	2	0	1	0	0	3	3	5	1	10	9	7	6	12	32	36	22	3	160
飛騨	6	9	1	0	0	1	1	0	0	0	4	2	8	6	2	2	27	47	14	16	9	2	157
合計	36	82	25	62	11	16	24	5	5	10	51	53	45	56	73	45	228	224	254	236	180	78	1799

※横軸：西暦（50年単位）、縦軸：圏域

各圏域の合計数の1割以上の数値

表3 時期別の立地数（総合調査報告書（県文財セ2023）の数値を引用・合計値のみ追記）

	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	合計											
平地	24	20	7	27	3	3	9	0	1	5	16	23	14	14	24	18	112	106	133	172	148	75	954
山麓	5	19	6	4	3	1	2	0	0	1	11	2	12	15	24	12	47	59	100	84	88	38	533
山腹等	2	6	7	6	1	2	5	3	2	1	3	0	4	5	9	5	2	3	15	9	13	4	107
不明	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	4	3	1	3	1	15
合計	32	45	20	37	7	6	16	3	3	7	30	25	30	34	58	36	161	172	251	266	252	118	1609

※横軸：西暦（50年単位）、縦軸：圏域

伴い、寺院も現集落と重なった位置に造営されていったと考えられる。なお、15世紀後半には、西濃・岐阜・中濃・飛騨圏域において真宗寺院の興隆が際立つ一方で、真宗寺院が少ない東濃圏域では15世紀後半における寺院数の増加は認められない。そのため、この時期の寺院数の動向は、主に真宗寺院の布教活動と関連する可能性がある。

なお、養老町の柏尾廃寺跡では16世紀後半には主要堂宇や墓域での遺物採集がなく、同町の竜泉寺廃寺跡でも16世紀の遺物は主要堂宇で採集されていない。同様に、瑞浪市の桜堂遺跡でも15世紀後半には山中の本堂は別の場所に移動したと推定されている。その一方で、これらの寺域には16世紀代の石塔・石仏が多く認められ、特に柏尾廃寺では16世紀後半から17世紀代と考えられる石仏が1000基近く存在する（竹田2020）。このように、山中の主要堂宇の機能が低下してもなお多数の供養塔が寺域に納められたことは、寺院のあった場所そのものが後世になって信仰の対象地として認識され続けていたためであると考えられる。

おわりに

5年間に及ぶ総合調査では、県内の市町村史に掲載されている近世以前の寺院を網羅的に調べ上げ、その所在位置や時期を整理するとともに、主要な寺院の地形観察図を作成し、構造等を分析できたことに大きな意義があったと考える。これは、開発行為等との調整や遺跡の保存整備・活用のための基礎資料となることはもちろんのこと、本県の歴史や文化をさらに詳しく探求するための貴重なデータであり、他県の状況と比較する際の素材となり得る。この成果を総合調査報告書の刊行で終わりとせず、むしろこれを始まりとして、新たな調査研究や保存活用事業等を展開していくことが大切である。

その取組みを進めるために、小稿では総合調査における課題を研究テーマとして取り上げた。ここでは、詳細分布調査や発掘調査が実施された岐阜県の古代・中世寺院を概観し、その立地や構造、存続時期などの分析を試みたが、詳細分布調査にて地表面で観察できる遺構の特徴は、その寺院の最終

段階（廃絶時）の姿であり、遺構の変遷や詳細な時期の検討には限界がある。よって、小稿で提示した寺院の画期的設定は、発掘調査等の進展とともに見直しを図る必要がある。今後のさらなる調査研究や事業展開に期待したい。

謝辞

小稿の執筆に際し、以下の方々からご高配を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます(五十音順、敬称略)。

今津和也、岩田崇、岩原剛、内堀信雄、大下永、大須賀広夢、押井正行、亀田剛広、上川通夫、後藤建一、竹田憲治、中島和哉、林正憲、菱田哲郎、廣瀬正嗣、藤岡英礼、松井一明、水谷豊、溝口彰啓、三宅唯美、三好清超、三輪嘉六、村木二郎、山路裕樹、横幕大祐

【令和5（2023）年4月校了】

注

- 1) 総合調査の期間中、筆者は岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課に所属し、総合調査を補助した。
- 2) 総合調査報告書では「平坦面」と表現しているが、場所によって面として人為的に形成されたか否かの判断が困難な場合もあるため、小稿では「平場」と表現する。
- 3) 小節で用いる挿図は、寺院が立地する地形や山麓との集落との位置関係を把握するために大縮尺で作成したが、平場の詳細については総合調査報告書を参照されたい。また、挿図では地形の理解を共有するために、令和3年10月に公開された「ぎふ森林情報 WebMAP」を活用した。なお、小稿での寺伝や縁起等の記載は、引用文献を示していない場合は原則として総合調査報告書からの引用である。
- 4) 小稿での土地に関する表現は、山路氏の提言（山路2011）に従い、金堂・塔などからなる宗教空間と蔵・厨からなる運営空間を「伽藍地」とし、「寺院地」には伽藍地と園地などの「附属施設」を含める。また、寺が所有する一切の土地を「寺地」とし、寺地のうち「寺院地」以外の領地を「寺領地」とする。なお、寺域は寺院地の広がりを示す語として用いる。また、各寺院の平場に「金堂跡」、「本堂跡」などの既存の名称がある場合は引用文献を示した上でその用語を使用し、既存の名称がない場合は「主要堂宇」等の表現を用いた。
- 5) 養老町教育委員会中島和哉氏、廣瀬正嗣氏の御教示による。
- 6) 近年の研究では、光寿庵跡と石橋廃寺出土の素文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦は8世紀中頃以降に制作されたものと考えられている（三好2019）。
- 7) このことは、すでに『国府町史』（国府町史刊行委員会2011）や牛丸氏（牛丸2011）、菱田氏（菱田2023）の論考でも触れられている。
- 8) 引用文献に遺物の年代が示されていない場合は、既存の文献（愛知県史編さん委員2007）を参考にした。
- 9) 久保智康氏は、古代の山寺に関して、平安時代に遡る仏像・仏具などの美術工芸品を伝える寺院で、その開山・中興伝承が平安以前に遡る場合は、少なくとも平安時代のある時期には活動していたとした（久保2012）。
- 10) 寺院跡の踏査報告が藤井治左衛門氏によってなされ（藤井1958）、氏が使用した堂等の名称は「」（カッコ）で示した。
- 11) 池田町教育委員会横幕大祐氏の御教示による。
- 12) 寺院の前身となる宗教施設の遺構が検出されている場合は、その時期から遺構が存続しているものとして示した。

引用文献

- 愛知県史編さん委員 2007『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』
- 井川祥子 1994「古代美濃国における軒瓦の様相」『岐阜市歴史博物館 研究紀要』8
- 池田町教育委員会 1991『池田町遺跡地図（改訂版）』
- 上原真人 2002「古代の平地寺院と山林寺院」『佛教藝術』265
- 上原真人・梶川敏夫 2007「古代山林寺院研究と山科安祥寺」『皇太后の山寺—山科安祥寺の創建と古代山林寺院—』柳原出版
- 上原真人 2011「国分寺と山林寺院」『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館
- 牛丸岳彦 2011「清峰寺の立地と伽藍配置について」『応永飛騨の乱 600 年記念誌 姉小路と廣瀬』姉小路家・廣瀬家特別事業実行委員会
- 内堀信雄・小野木学・山田哲也・井川祥子・島田崇正 2002「美濃地域における中世集落の様相」『東海の中世集落を考える』第9回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 恵那市教育委員会 2000『正家廃寺Ⅱ・寺平遺跡』
- 恵那市教育委員会 2018『正家廃寺Ⅲ・寺平遺跡』
- 大垣市教育委員会 1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書—解説編—』
- 大下永 2018「飛騨における中世山寺の空間構造について」『斐太紀』平成30年秋季号
- 小川榮一 1939「柏尾廃寺址」『岐阜縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第八輯 岐阜縣
- 小野木学 2019a「小型五輪塔製作の一事例」『中世石工の考古学』高志書院
- 小野木学 2019b「美濃の一石五輪塔」『研究紀要』第5号 岐阜県文化財保護センター
- 加子母村 1972『加子母村誌』
- 梶川敏夫 2007「平安京周辺の山林寺院と安祥寺」『皇太后の山寺—山科安祥寺の創建と古代山林寺院—』柳原出版
- 上川通夫 2014「中世山寺の基本構造—三河・尾張の事例から—」『愛知県立大学日本文化学部論集』第6号
- 上川通夫 2023「文献からみた古代・中世の寺院」『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』岐阜県文化財保護センター
- 岐阜県教育委員会 1983『歴史の道調査報告書 南北街道』
- 岐阜県文化財保護センター 2001『寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2005『重竹遺跡・上西田遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2009『野内遺跡B地区』
- 岐阜県文化財保護センター 2012『野内遺跡C地区』
- 岐阜県文化財保護センター 2020『栗原九十九坊跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2021『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 久保智康 2001「古代山林寺院の空間構成」『古代』第110号 早稲田大学考古学会
- 久保智康 2012「宗教空間としての山寺と社—古代出雲を例に—」『季刊考古学』第121号 (株)雄山閣
- 下呂市教育委員会 2007『鳳慈尾山大威徳寺跡 平成15～18年度範囲確認調査報告書』
- 下呂市教育委員会 2011『鳳慈尾山大威徳寺跡 平成19～20年度範囲確認調査報告書』
- 国府町教育委員会 2005『石橋廃寺調査報告書』

- 国府町史刊行委員会 2011『国府町史 通史編』Ⅰ
- 佐藤光一編 2019『白雲山観音堂』
- 清水眞澄 1990「岐阜県の仏像」『岐阜県の仏像』岐阜県博物館
- 斎藤忠 1996「いわゆる山寺の諸問題」『大知波峠廃寺シンポジウム事業報告書 平成7年度』湖西市・湖西市教育委員会
- 坂本廣博 1982「横蔵寺の歴史」『古寺巡礼 東国6 横蔵寺』淡交社
- 竹田憲治 2020「東海 中世末・近世初頭の石塔の展開」『中世墓の終焉と石造物』高志書院
- 垂井町教育委員会 2017『垂井町遺跡詳細分布調査報告書』（1）
- 富永樹之 2006「東国の「村落内寺院」の諸問題—千葉県以外を主体として—」『在地社会と仏教』奈良文化財研究所
名古屋大学考古学研究室編 1974『大和村の遺跡』大和村教育委員会
- 早川万年 2003「造寺と建郡」『美濃国戸籍の総合的研究』太洋社
- 林正憲 2021「美濃地域における古墳から寺院への変遷過程」『昼飯の丘に集う—中井正幸さん還暦記念論集—』
- 菱田哲郎 2023「他地域との比較からみた岐阜県の古代寺院」『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査』岐阜県文化財保護センター
- 飛騨市教育委員会 2023『上町遺跡8』
- 藤井治左衛門 1958「円興寺旧址を探る」『岐阜史学』第23号
- 藤岡英礼 2012「空間構造」『季刊考古学』第121号（株）雄山閣
- 藤澤一夫 1956「寺址」『日本考古学講座』1 河出書房
- 藤澤良祐 2001「埋納された古瀬戸製品—特に大型壺・瓶類を中心として—」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』XVIII
- 文化庁文化財部記念物課監修 2013『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』同成社
- 瑞浪市教育委員会 2014『笹山遺跡』
- 瑞浪市教育委員会 2017『桜堂遺跡』
- 美濃市教育委員会 2012『美濃観音寺山古墳・長福寺遺跡・西観音寺遺跡・東観音寺遺跡』
- 三宅唯美・小野木学・中嶋茂・砂田晋司・竹谷充生 2011「瑞浪市の中世石塔」『瑞浪市歴史資料集』第1集 瑞浪市陶磁資料館
- 三好清超 2019「飛騨における軒瓦の一様相」『古代寺院史の研究』思文閣出版
- 山路直充 2011「寺の空間構成と国分寺—寺院地・伽藍地・付属地—」『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館
- 大和町教育委員会 1994『白雲山観音堂中世墳墓発掘調査報告書』
- 横山住雄 1996『岐阜県の石仏石塔』濃尾歴史研究所
- 養老町教育委員会 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』
- 養老町教育委員会 2016『竜泉寺廃寺跡分布測量調査報告書』
- 渡辺博人 2003「美濃の集落」『美濃国戸籍の総合的研究』太洋社

表1 参考文献（番号は表1のNo. に対応）

- 1 垂井町教育委員会 1973『史跡宮代廃寺跡発掘調査報告』
- 2 梶原義実 2022「願興寺本堂の発掘調査」『発掘調査講演会』御嵩町教委
- 3 岐阜市教育委員会 1999『城之内遺跡—長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査—』

- 4 各務原市埋蔵文化財調査センター 1993『野口廃寺A地区の発掘調査報告書』
- 5 国府町史刊行委員会 2011『国府町史 通史編Ⅰ』
- 6 各務原市埋蔵文化財調査センター 2010『山田寺跡』
- 7 岐阜県文化財保護センター 2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』、同 2005『太江遺跡』Ⅱ
- 8 高山市教育委員会 2005『石橋廃寺調査報告書』
- 9 岐阜県文化財保護センター 2000『高畑遺跡』
- 10 高山市教育委員会 2003『三仏寺廃寺跡発掘調査報告書』
- 11 関市教育委員会 2009『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺跡 一講堂跡発掘調査 平成9・10年度一』
- 12 山岡町教育委員会 1988『山岡町文化財調査報告：山岡廃寺跡（手向廃寺跡）』
- 13 古川町教育委員会 1998『杉崎廃寺跡発掘調査報告書』
- 14 飛騨市教育委員会 2023『上町遺跡8』
- 15 垂井町教育委員会 2010『美濃国分尼寺跡発掘調査報告』
- 16 飛騨市教育委員会 2023『上町遺跡8』
- 17 恵那市教育委員会 2000『正家廃寺跡Ⅱ・寺平遺跡』、同 2018『正家廃寺跡Ⅲ・寺平遺跡』
- 18 岐阜県文化財保護センター 2021『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』
- 19 岐阜県文化財保護センター 2011『三枝城跡』
- 20 大垣市教育委員会 2005『美濃国分寺跡』
- 21 高山市教育委員会 1990『飛騨国分尼寺跡発掘調査報告書』
- 22 養老町教育委員会 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』
- 23 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 24 岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2006『西ヶ洞廃寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平5号古墳』
- 25 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 26 岐阜県文化財保護センター 2003『寺平遺跡』
- 27 岐阜県文化財保護センター 2001『寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡』
- 28 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 29 大和町教育委員会 1994『白雲山観音堂中世墳墓発掘調査報告書』
- 30 瑞浪市教育委員会 2017『桜堂遺跡一範囲内容確認調査報告書一』
- 31 下呂市教育委員会 2007『鳳慈尾山大威徳寺跡』
- 32 池田町教育委員会 1991『池田町遺跡地図（改訂版）』
- 33 大垣市教育委員会 1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書一解説編一』
- 34 養老町教育委員会 2016『竜泉寺廃寺跡分布測量調査報告書』
- 35 養老町教育委員会 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』
- 36 内堀信雄 2021『戦国美濃の城と都市』高志書院
- 37 恵那市教育委員会 1991『観定寺遺跡発掘調査報告書』
- 38 井上喜久男 1982「岐阜県恵那郡岩村町大円寺跡出土の陶磁」『瑞浪陶磁資料館 研究紀要』第1号
- 39 多治見市教育委員会 2007『永保寺庫裡跡発掘調査報告書』、同 2011『永保寺本堂跡発掘調査報告書』
- 40 各務原市埋蔵文化財調査センター 2005『承国寺遺跡発掘調査報告書』